

町史のひとこま

(第十二回)

旅石の廃寺

海蔵寺をたずねて(中)

私は、古書にみえる海蔵寺というの、今は尋光寺と呼ばれている郡中観音の十七番札所のことだろうと思うようになりました。旅石の人たちが「お観音さま」と呼んでいるところです。和尚さんが見せてくれた観音霊場の巡礼案内図は志免東中の河辺秀治先生が個人で作られたものですが、十七番を「海蔵寺」とはつきり書かれています。旅石では海蔵寺という名を誰も知らないし、使ってもいません。ところが、他からはそう呼ばれているのがふしぎです。河辺先生に電話で問い合わせてみることにしました。

河辺先生によると、郡中三十三観音の札所には、御詠歌(仏様をたたえた歌)の額が奉納されたお寺がいくつかありますが、その中に海蔵寺と書いたものがあるとというお話でした。さっそく、教えられた粕屋町大隈の泉寺(二十二番札所)を訪ねてみました。

泉寺は、杉氏の出城とされる丸山のふもとにあるお堂で、正面に扁額があがっていました。「大正十年四月四日」「御国中三十三カ所順拝同」の記念に奉納された「郡中三十三カ所霊場御詠歌」の額です。たしか「旅石海蔵寺十一面観世音菩薩」と書かれているのはつきりと読めます。少なくとも海蔵寺という中世の禪寺の名が現在も生きていることはわかりました。

しかし、ここにもうひとつ、

○一番若杉石泉寺の額 (明治二十五年奉納)

○十七番旅石尋光寺の額 (大正五年奉納)

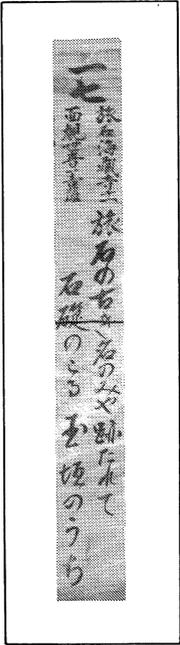
○二十二番大隈泉寺の額 (大正十年奉納)

「写真は、大隈の額(部分)」

「写真は、大隈の額(部分)」

「写真は、大隈の額(部分)」

「写真は、大隈の額(部分)」



ゾがあります。同じ郡中札所の御詠歌額を手元の資料で調べてみると、旅石に限ってはいいちがう点がいくつかあるのです。これはなぜでしょうか。年代順にならべてみると次のようになります。

○一番若杉石泉寺の額 (明治二十五年奉納)

○十七番旅石多米寺

旅衣ふるき名濃しの跡になく石礎残る神垣の内 ※筑前若杉郷土誌による

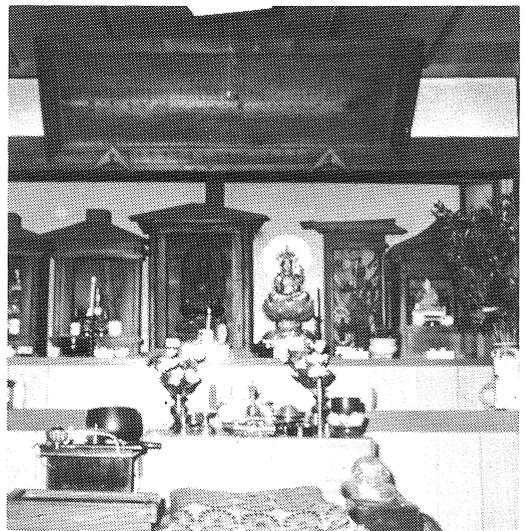
○十七番旅石尋光寺の額 (大正五年奉納)

○第拾七番旅石村尋来寺

旅衣ふるき名のみやあとたえていしすゑ残るたまかきの内 ※印藤藤七郎氏の書

○二十二番大隈泉寺の額 (大正十年奉納)

「写真は、大隈の額(部分)」



尋光寺の内部。正面に十一面観音像、その上に御詠歌額が見える。

一七旅石海蔵寺十一面観世音菩薩

旅石の古き名のみや跡たれて石礎のころ玉垣のうら

このように時代を異にする三つの扁額をくらべると、いずれも寺の名がちがいます。御詠歌にもわずかなちがいが認められます。どういふわけでしょうか。

たのか。私には今はナゾというほかありません。

さて、尋光寺の財津晴海さんのお話は興味深いものがありました。

「この寺は斜面を背後に建っていますが、むかしのお寺は戦間に有利な位置を選んで建てられたものだということ、それにふさわしい地形のようです。また、この寺の十一面観音様を毎日拝むことは、若杉山頂上の大祖宮を拜むことにもなります。観音様を延長した位置に大祖宮があるからです。昔はここらも大祖宮の遙拝地(遠くから拜む場所)だったのかもしれないね」

(町誌編集委員会事務局石瀧)

(町誌編集委員会事務局石瀧)